

郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史さんぽ

—— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 ——

第74回 志木の民話「猫の怪」(伝説)

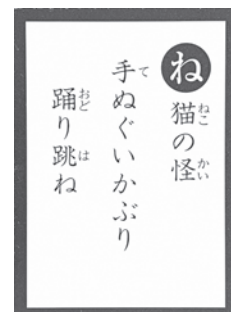
ある年の夏、長勝院(志木第三小学校と市営墓地の間にあった寺院)の近くの農家で、庭先に干した手拭が頻繁になくなり、人々は手拭泥棒を探索したが、手がかりもないままに秋となりました。ある日の夜のこと、館村のお百姓さんが水子村での用事を済ませての帰り道、長勝院の裏手の雑木林からにぎやかなざわめきが聞こえるので、近づいて見るとたくさんの猫が集まって踊り跳ねており、どの猫もみんな手拭をかぶっていたといいます。その翌日から「家々の手拭を盗んだのはみんな猫の仕業だとうよう。」「猫は魔物だとうけど、やっぱり本当だなあ。」というような噂が村中に広まりました(柏町3丁目付近の

伝説)。

この民話は、市のホームページで見られるものですが「熱い粥で口笛がふけん」という猫が登場する民話も志木市教育委員会『志木の伝説／第二集』一文集『いちば』第11号所収「老いの寝言」による一として紹介されています(昭和56年発刊)。また、昭和60年には『志木市史・民俗資料編1』に「猫踊り」として登載され、昭和63年にも人と文化社の『失われゆく民話・伝説』の中で、鈴木亨氏が紹介しています。これらの民話は子どもたちに聞き継がれ、語り継がれて大人気になり、市内小・中学校の児童・生徒が作成した「しき郷土かるた」の絵札・読み札にもなっています。奇抜なネーミングと猫のユーモラスさをどうぞお楽しみください。



▲「しき郷土かるた」の絵札



▲「しき郷土かるた」の読み札



水とともに歩んだまち志木

秋風が心地よい季節となり、読書や散策が楽しい時季を迎えました。一方で、朝晩の冷え込みも増し、インフルエンザなどの感染症が流行していますので、皆さん体調管理にはくれぐれもお気をつけください。

市政に目を向けますと、郷土資料館と埋蔵文化財保管センターが複合化した「志木市歴史館」(柏町1丁目)が、10月26日にオープンしました。市の歴史や文化財をわかりやすく紹介する展示室のほか、各種体験や自習ができるふれあいホール、貴重な資料を後世に継承するための収蔵室を整備。ぜひ、歴史館を訪れ、体いっぱい志木市の歴史を感じてください。

さて、本市の歴史の特徴に「水と人との共生」があります。全国の市の中で6番目に小さい面積の志木市には、柳瀬川、新河岸川、荒川の3本の川が流れており、水は住まいや商業、農業など、まちの成り立ちに深く関わってきました。

市内には旧石器時代から近代までの遺跡が残されており、その多くは柳瀬川や新河岸川に向かって下る坂の手前、台地の縁にあります。約3万6千年前の石器群が見つかった中道遺跡(柏町)や、縄文・弥生時代に関東屈指の

大集落があった西原大塚遺跡(幸町)も水場に近い高台にあり、水の恵みを受けながら、川の氾濫にも備えられる場所を、昔の人々が選んでいたことがうかがえます。

また、江戸時代には水との関わりが一層深まりました。江戸と川越をつなぐ新河岸川を行き来する船で、人や荷物を運ぶ水上交通(舟運)が盛んになると、船が着く河岸と街道が交わる場所に位置していた志木は、一大商業地として発展しました。都内で現在も見ることのできる「志木街道」という道路標識は、商業のまちとして発展していた、その栄華の証なのです。

先人たちは、農業でも水と向き合いました。宗岡や館は低地で田んぼづくりに適していましたが、田んぼは川より高い場所にあったため、水を引くのが難題でした。そこで江戸時代に志木地区が終点だった野火止用水を、宗岡地区まで延ばすことに。新河岸川を越えるために、木でつかった水の通り道(木樋)を48本もつないだのが「いろは樋」です。しき郷土かるたの一句に「宗岡に うるおいあたえた いろは樋」がありますが、「いろは橋」「いろは商店会」「いろは親水公園」など、志木市にはたくさんの「いろは」が受け継がれているのです。

いろは樋は、市の公式インスタグラムの投稿(プロジェクトM)でも紹介していますので、ぜひ、ご覧いただければと思います。

新しくオープンした志木市歴史館には、遺跡から見つかった古に思いを馳せることのできる石器や土器がたくさん。志木市歴史館で見つかる「いいね!」が、志木市への愛着をより一層深め、志木市の魅力をより多くの人に語り継ぐ力になることを願ってやみません。